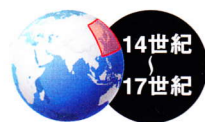


挑んだ豊臣秀吉

明の冊封体制により東アジアの中華秩序が確立する

東アジアでは13世紀の元末期の混乱以来、私貿易がさかんとなっていたが、14世紀後半には、私貿易商人が武装して朝鮮

半島の高麗や中国沿岸を襲撃するようになった。これを前期倭寇という。明は倭寇への対策と国内経済の安定を図るため、中国人商人の交易・渡航を禁じる海禁策をとった。そのため明との交易は、明の冊封を受けた朝貢という形で



中華帝国の明を中心にした秩序が東アジアに確立するが、日本を統一した豊臣秀吉がこの秩序に挑戦する。

行われた。

一方、朝鮮半島では13世紀後半にモンゴルの属国となっていた高麗が、明の成立後はその冊封を受けていたが、倭寇の侵入などにより国力が衰えていた。

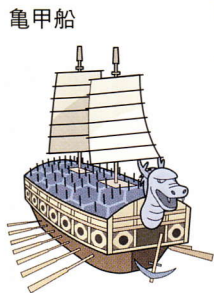
に反発して明の征服を企て、その先鞭として2度にわたり朝鮮に侵攻した(文祿の役、慶長の役)。この侵攻に対し、朝鮮は当初劣勢であったが、亀甲船団を率いて戦った李舜臣の活躍や、明の援助により日本軍を撃退した。

明が滅び強大な清(P68参照)が成立すると、朝鮮、琉球、東南アジア諸国は、引き続き中華帝国の冊封体制に組み込まれつつ、交易を続けた。

日本は、江戸幕府が朝鮮との国交を回復し、また、当初は対外貿易をさかんに行っていたが、17世紀半ばに鎖国へ転じた。しかし、清や朝鮮との交易は江戸時代を通じて維持され、朝鮮からは朝鮮通信使が日本へ派遣された。

日本軍を撃退した 亀の形をした軍船

日本で文祿・慶長の役とよぶ秀吉の朝鮮侵攻は、朝鮮では壬辰・丁酉倭乱とよぶ。このとき朝鮮水軍を率いた李舜臣が用いた亀甲船は、もともと倭寇(前期)の撃退用につくられた船だった。敵船にのり込んでの斬り込みを得意とした倭寇に對抗するため、船全体を亀の甲羅のような屋根で覆い、屋根一面に刀を上に向けて差し込んでいた。壬辰・丁酉倭乱でもこの装備が効果を発揮し、日本水軍に壊滅的な打撃を与えた。



13~16世紀、私貿易商人が海賊化し、朝鮮、中国沿岸で略奪行為をした集団。日本人が主体の前期倭寇は14世紀に盛んであったが、15世紀には、室町幕府の取り締まりなどにより下火となった。16世紀に明の海禁に抵抗して武装化した後期倭寇は中国人が中心で、明の海禁解除や豊臣秀吉の海賊停止令などによって終息した。

明代末期の東アジア

明の冊封体制による中華秩序に日本豊臣秀吉が反発して朝鮮半島に侵攻。それが明滅亡の一因となった。

1619年

サルフの戦い
後金(こうきん)の太祖ヌルハチが明軍を破り、勢力を広げた。明清交代へとつながる決定的な戦い。

こうきん

後金
1616年、ヌルハチが女真族を統合して建国。36年、ホンタイジが朝鮮を服属させると国号を清に改め、44年の明滅亡後、中国を統一する。

秀吉の朝鮮侵攻

日本国内を統一した豊臣秀吉は、中国征服を旨とし、朝鮮にその先導役を求めたが、朝鮮がこれを断ると大軍を送り、侵攻した。2度にわたる侵攻(文祿・慶長の役)で朝鮮国内は荒廃した。

文祿の役

日本軍経路

1592~96年

慶長の役

日本軍経路

1597~98年

豊臣秀吉が国内を統一したのち、徳川家康が江戸幕府を開く。

1592年

関山島の海戦

李舜臣(りしゅんしん)率いる朝鮮水軍が、亀甲船を用いて日本水軍に大勝し、その補給路を断った戦い。

後期倭寇

後期の倭寇は、日本の五島列島や薩摩などを根拠地とし、東シナ海を渡って明の南部沿岸一帯を襲った。

Key Word 倭寇